

桐生における機神（はたのかみ）伝説

昔話「山田白滝」との共通性と独自性を求めて

小林公子

はじめに

桐生は、近世高級絹織物業が発展し「関東の西陣」と呼ばれるようになった土地である。そこには桐生織物祖神と称せられる白滝姫伝説が機神の伝説として存在している。『桐生織物史』はこの白滝姫伝説について「桐生織物の起源については、遺憾ながら微証するに足るべき文献がない。唯民間伝承する所の仁田山機神伝説あるのみである*₁。」と述べ、桐生における古代の絹織物生産の歴史は不明としながら、その起源にたいする考証として四種の機神伝説を掲げている。しかし、これらの伝説は昔話で「難題婿」類と呼ばれている形態のなかの「山田白滝」の系統に属するものが転化したも*₂のと思われ、既に昭和五年（一九三〇）に柳田国男が『桃太郎の誕

生』のなかの「山田の露^{*3}」で「山田白滝」の伝説についての分析も試みられ、桐生における機神にも触れている。また、昭和四七年（一九七二）には白田甚五郎が『国文学』誌に民俗文学の探訪シリーズとして諸国に伝えられている数々の「山田白滝」伝説について取り上げてもらっている^{*4}。そしてこういった昔話としての「山田白滝」は北は青森県から南は鹿児島県に至る日本各地に存在し、その数は百種以上に上るともい^{*5}う。確かに桐生における機神伝説もそれらの「山田白滝」の話の一つの系譜として創作されたもので、それらの話との共通的な面も見いだせるが、それらを素材にしつつ独自な見解を以て、白滝姫を織物の神として位置づけ、機神伝説を作り上げてもいる。他の地に類を見いだせない機神伝説がどのようなにして桐生に伝わり、そして、桐生独自の機神（はたのかみ）伝説を誕生させていったのであるうか。それには先ず各地に点在する種々の「山田白滝」に関連する伝説や昔話、口説節などについて、柳田や臼田が示している考え方を参考にし、それらとの共通性と独自性を考慮し、この機神伝説が桐生にもたらした意義を考えてみたい。

桐生地域に伝わる「山田白滝」伝説を紹介する。

第一章 桐生に伝わる「山田白滝」伝説

桐生には『桐生織物史』等に記載されている機神伝説四^{*6}。話と、上州の民話として『山田郡誌⁷』に載せられる伝説を含め、次のような五種の「山田白滝」伝説が存在する。

ア 上野国山田郡仁田山郷機神天神縁起（白滝神社所伝）

イ 上州仁田山白滝姫伝記 略縁起（白滝神社所伝）

ウ 機神白滝姫御真影竝御伝記（新居家所蔵）

エ 白滝姫伝記（中沢宏繁勤書）

オ 上州の民話 山田白滝 （山田郡誌所載）

以下、これらはア、イ、ウ、エ、オと略して紹介する。

このうち、アとイは白滝神社に所伝として伝わるもので、アは二度に渡る山田白滝の歌の応答を示し、神社の縁起であるが、最後に弘法大師や法然上人までも取り込み、その御利益を説いている。イは比較的短い縁起構成であるが、白滝姫自身が機神社を建立したと述べ、やはりその御利益を説いている。ウは新居家が桐生織物の宣伝のため白滝姫の御真影と伝記を版刷にし絹織物に巻き込み、文書絵画による宣伝に利用したと伝えられている。

エは最初に天照大神以来の織物の由来を漢文で掲げ、前記のものに比べて情緒的な文章で綴られ、特に白滝姫の帰国後の様子については詳細に伝え、最後に白滝姫と北野天神信仰を結びつけ、そのご利益を強調している。オは、山田白滝と題して『上州の民話』や『日本伝説大系』¹⁰にも載せられているが、いずれも『山田郡誌』より転載したものである。仁田山とか小倉という地名を付けたと白滝姫の行動を述べるが、信仰についての記載はみられない。

これらの五種の伝説を比較したものを（資料一）として紹介する。次のようなことが理解できよう。時代の設定は、古いものからウが淳仁天皇、アが桓武天皇の時代であるのに対し、イとエは鳥羽天皇の時代とし、オは時代設定をしていない。これはアとウが白滝姫を中将姫の妹として話を構成しているので、それに適合させる為、奈良時代末ないし平安時代初期に設定したのに対し、イとエはともに鳥羽天皇時に設定しており、これらの年代

(資料一―一) 桐生の機神諸伝説と上州民話の比較(一)

時代設定	男	女	帝	その後の行動
ア 桓武天皇	夫役 禁裏の庭の掃除 山田夫	白滝の前 横萩右大臣の次女 当麻中将姫の妹	望みを尋ね、歌合わせをさせる えいぶんにまします 宿の妻に下しおかれる	本国に帰り、仁田山郷岩本に仮屋を仕つらえる いとなみの手遊びに糸機を里人に教える
イ 鳥羽天皇	源為義の臣 仁田山村の舎人 山田夫・庭の掃除	白滝姫と申す官女	叡聞に達す 舎人に下される。	勿体なくも仁田山村へ伴ひ奉りける 朝夕慰みとして織物を営む 機神社を建て、栲機千々姫命を祀る
ウ 淳仁天皇	上野国桐生の人 山田某	白滝といへる宮女	叡聞に達す 山田が妻に下しおかれる	うれしさ限りなく、其まま具して桐生に帰る 偕老の化たらひなしけるは天平宝字丑歳なりけむ 養蚕、糸繰り、機織ることを桐生の里人に教へ給う 遠国へ狷引し、本國に成りしかば、賤か伏屋に入給ふ しつ女の連を招き、御慰みあり
エ 鳥羽天皇	禁裏造営の夫役 舎人之助 山田舎人と申す	四条左大臣の三女 白滝御前 天子の御妃	叡聞にまします 田夫下郎の身、歌の心の優しさ 情あれ哉と御免す	糸組安き絹木綿立てる品々を、最念頃に御指南有り 仁田山・小倉の地名をつける
オ 時代なし	山田某	公卿某の娘 白滝姫	父が追放したので登場しない	

(資料一―二) 桐生の機神諸伝説と上州民話の比較(二)

事項	白滝姫の死後・機神としての信仰・御利益	白滝姫死後の山田夫	白滝社の祭日	中将姫	制作年代・制作者
ア	命終わりにて一社の神と祀り、岩本と云うところに社あり 此白滝の明神、機織神の根源也 あゆみをはこぶ輩には糸絹の名人となり御利益あるべし	夫婦縁結びの神 山田の権現といはひ奉る 縁組み思いのままにかなうべし	三月初の子の日 参詣の人、所願皆満す	関連有	御公儀様に絹永差上 正保三年(一六四六) 以後に作成 不明
イ	死後、機神として祀る。 御恵弥増り、神の教へたまふにより、糸絹国益となり 辺鄙の民の艱難を救はんため、人と化し営業を授けたまふ	舎人の霊も機神社に祀る			白滝姫没日永久五年(一一一九)より七 年後に作成 不明
ウ	仁田山に機神と崇め奉り、桐生絹の源は白滝姫の神恩也 機織る人はもとより、機織らぬ人も皆その余澤を受ける 神の御神澤を蒙り、御神影を祭り、弥々信心あるべし		七月七日 桐生糸機の祖神 織女星になぞらえ祀る	関連有	文化元年(一八四) 七月に作成 小寺応齋
エ	機織給ふ傍、岩本に奉葬 白滝大明神、博蓮社清誉妙薫禪尼、 上州絹を京都まで下絹なれとも名を掲げ民の渡世の種とな	貴僧知識を請待、追善供養をなす 空夢と名を改め、僧になる 白滝の菩提を弔う			文政二年(一八一九) 一月作成 中澤宏条
オ	大岩の下になきがらを埋める 機神として信仰の記述はない。	二ヶ月に一度は墓参す			不明 不明

はいずれも平安もしくはそれ以前としているのは、桐生の織物が古代から行われている古い歴史をもつものであり、機神信仰も古代から行われていたと云うことを念頭において、伝説として作成されたものである。

次いで伝説の登場人物についてみると、男は山田夫・仁田山村の舎人・山田某・山田舎人との名で呼ばれ、禁裏の夫役・庭掃除など、何れの伝説においてもほぼ同様な人物として扱われている。ただ、イが源為義の臣とされているが、是は後述するこの伝説の元になったと思われる栗花落家のある撰津丹生山田庄を為義が鳥羽帝時代に領し、現在も同地に祀られている六条八幡宮は、京都の八条の自邸から為義が勧請したとされ、作成当時に既にこのような伝説も存在し、桐生に伝えられていたのかもしれない。

女についてはイが四条左大臣の三女、天子の御后としている。これは中将姫の妹説より一層高貴な身分に仕上がたとみられるが、四条左大臣については『公卿補任』などからは人物は特定できず、創作されたものである。アとウは中将姫の妹としており、イトも公卿の娘で禁裏に仕える女官と想像される。

帝については、オが父の公卿によって追放され、帝は登場しない以外は、いずれも歌合せを行わせ、下賤に似合わない歌のすばらしさを認め、叡聞に達して白滝姫を妻に下されるという設定で、その後、白瀧姫を伴い帰国をしている。アとイが、その地を仁田山郷、仁田山村としているのは白瀧神社の所伝であるから神社の所在する土地、仁田山とし、ウは新居家が桐生の絹仲買であるから、その地を桐生としており、これらからもそれぞれの制作意図の反映が伺われる。オが機神伝説としての性格は全くみられない以外は、いずれも白瀧姫が糸機を里人に教え、死後、機神として祀る謂われが説かれている。夫の山田夫については、アとイは死後同社に祀り、アは山田権現として縁結びの神と述べているが、現在は祭神としては祀られていないようだ。

祭神については、イの縁起が栲機千々姫命を白滝姫自身が祀り、その死後、白滝姫も機神として同社に祀った

とされるが、現在の同社の祭神は天八千々姫命と白滝姫であり、栲機千々姫命は祀られていない。『桐生織物史』は栲機千々姫命と天八千々姫命とを同一神と述べているが¹²、一般的には別の神とされている。ただ、現在も桐生の他社には多く機神として栲機千々姫命を祀る所が存在しているから、この縁起の文字化の時期にはこのような信仰も存していたのかもしれない。

白滝社の祭日については、アが三月初の子の日、ウが七月七日としている。これは現在の白滝社の祭日が八月七日に行われていることから、新暦への移行という点を考慮すると、アとウの成立の間に変更されたと考えられないだろうか。従って、アの文字化の時期は不明であるが、ウに先行して成立したと解される。その時期は「公儀様へ絹永差上」の記事から、絹永が行われたのはは正保三年（一六四六）以後とされ¹³、アの作成には『撰陽群談』などを参照したと思われるので、それは一八世紀中葉以降であろう。ウとエは作成年月が明記され、その時期である文化・文政期は桐生絹織物が近世において最も盛んな時期に当たる¹⁴。イは、白滝姫の没年を永久五年（一一一九）とし、それ以後七百年あまり後との記から一八二〇年前後と考えられ、成立順序は、ア、ウ、エ、イと推定出来るが、エとイについては伝説の内容が、イを参照してエが作成されたと思われる箇所もあり、逆であるとも判断されうる。いずれにしても一八世紀中葉から、一八二〇年頃までのあまり差のない時期に作成されたものである。創作が七十年ぐらいの短期間に次々となされたのは、この時期に桐生織物が最盛期を迎え、こうした縁起や伝記を文字化することによって、桐生織物の一層の振興を計ろうとする意図が大きかったと判断される。

また、（資料二）には、これらの伝説中の歌を載せたが、似たような歌が多く、たとえば、

ア ひてりせは山田の稲もかれぬかし落ちてたすけよ白滝の水

資料二 桐生の機神伝説と上州民話の中の歌

オ	エ	ウ	イ	ア	
須弥山の山より高く咲く花を心かけるな山田やつこ奴 水の泡きゆるこの身は白瀧の今はおちつる岸の岩本	水の泡消える我身は白瀧の今は玉散る峯の岩本 棲なれし花の都は荒もして昔ながらの山櫻かな しみみとねに引渡る水からに山田の稲も色なほらん	雲井からついには落ちるしらたきをさのみなこひぞ山田男よ 白瀧は實九重の雲の上八重の心は届かざるらん	白瀧の水の流れはとゞまらで今は玉散る岸の岩本 照り続き山田の稲も枯れはてゝ何を種とて命つくらん	山田夫かまた目もささぬ宮人におよはぬ恋の雲のかけはし 吾妻より山田からすが飛来り羽ばたきをして庭ぞはきける	白滝姫
辞世	辞世	辞世	辞世	辞世	歌の分類
日照りにて山田の稲も枯れ果る落ちて流よ白瀧の水	水無月のいなほの露のこがるゝに雲井を落ちぬしらたきのいと 雲の上目には見ゆれど白瀧の八重に思ひと落ちぬ君かな 戀ひ兼て山田の稲も枯れ果てる落ちてたすけよ白瀧の水	水無月のいなほの露のこがるゝに雲井を落ちぬしらたきのいと 雲の上目には見ゆれど白瀧の八重に思ひと落ちぬ君かな 戀ひ兼て山田の稲も枯れ果てる落ちてたすけよ白瀧の水	照り続き山田の稲のこがれなば落ちてたすけよ白瀧の水	飛び立ては雲井の空に羽のして大宮人をめの下に見る ひてりせは山田の稲もかれぬかし落ちてたすけよ白瀧の水	山田夫
辞世	辞世	辞世	辞世	辞世	歌の分類

イ 照り続き山田の稲もこがれなば落ちてたすけよ白滝の水

エ 恋ひ兼て山田の稲も枯れ果てる落ちてたすけよ白滝の水

オ 日照りにて山田の稲も枯れ果る落ちて流よ白滝の水

などは、ほぼ同様な歌と考えることが出来る。これは先行する伝説が同じであったせいかもしれないが、やはりどれかが先に作られ、それを真似して後の歌が作られたと考えるのが適当かと思うが、どれが先行の歌であるかを特定するのは困難である。同様なことが次の辞世の歌にもみられ、これらは粟花落家の伝説中にはみえず、桐生の創作であろうが、

イ 白滝の水の流れはとゞまらで今は玉ちる岸の岩本

エ 水の泡消える我身は白滝の今は玉散る峯の岩本

オ 水の泡きゆるこの身は白滝の今はおちつる岸の岩本

と類似し、先行した歌をもとに作成されたと想像されるが、作成順序の確定は難しい。

このように見ていくと、オが父の公卿から追放される形以外は、前半の部分については後述する粟花落家の諸伝説にほぼ類似し、身分の低い男が歌の功德によって高貴な娘を妻にするという一般的な「山田白滝」伝説と共通する面として考えてよいだろう。

このような桐生の機神伝説を考察する為、まず各地に伝わる「山田白滝」に関連する諸説を取り上げ、一般的なこの伝説の成立や流布の過程などについて検討を行ってみたい。

第二章 「山田白滝」の検討

一 柳田国男の「山田の露」について

柳田は、「山田の露」の考えのなかで、これらの多くの「山田白滝」の共通性についてどの様に考えているのであろうか。彼は「桃太郎説話の研究者として注意しなければならぬことが三つある¹⁵⁾」と伝説についての考え方を述べているが、

「一つは、是ほど久しい間、定まった形を以て流布して居た説話でも、やはり中世の或機会に、誰かの手によって改作せられ潤飾せられたということが、和歌によつて確認し得らる点である。」とし、昔話が和歌を中心として記憶されていると、部分の改作が行われて話に大きな変化がもたらされても、山田白滝のように、新しいものと古いものが重なり合つて多く分布している場合には、一つの要点を見出すことは可能であることを指摘している¹⁶⁾。確かに、「山田白滝」の話の内容は多種に渡っており、とても共通の話題から生じたと思えない話もあるが、歌には共通する部分が見いだせ、同種の伝説の変化と受け止めることが出来、共通性を見出しうる。

「二つには、この幸運又は多智なる賀がねの説話が、国の全土に流布しようとした勢力、殊に些しでも所縁の有る処には、必ず土着して伝説と化せんとした傾向である¹⁷⁾」と、各地に数多く伝播され、その土地に土着し、種々の話型を生み出していると同時に、「山田」というありふれた地名であるに拘わらず、其名の土地があれば多

くはこの昔話を過去の歴史の如く語り伝えて居る」と言われるように、山田という地名から多くの伝説が生み出されるとして、能登の鳳至郡鷓川村の山田部落に伝わる伝説や桐生の伝説について述べている¹⁾。桐生については上州郷土研究の桐生市荒土の条に「この白滝神社の祭神は、此地方の人に機織る芸を教えた白滝姫であると謂い、和銅7年に桐生の人山田朝臣なる者、九重に奉して此姫を恋い慕い、名歌の徳によつて姫を賜つて還つてきた¹⁾。」と桐生の機神伝説も取り上げている。そして応酬された和歌については、摂陽群談、乃至は京童跡追などに出ているものと同じであると述べ、桐生にも共通する地名として山田があり、この話を持ち歩いた者と、このような伝説を作成したいと願う者によつて、伝説の作成が行われたものであろうと、栗花落家の伝説を持ち出し、そして、関東や奥州の山田という土地での伝説作成の意図を説明している²⁾。

最後に柳田が注目するのは「説話が一国のしかも僅かな年代の間に於て、次から次へと変わつて行く足取りの早さである」と、能登の山田村では「白滝落ちよ」の文句が「中将姫の下に見る」というような歌詞になつても「山田白滝」の形態が認められるし、新潟県の例は男の名がモクズとなるがそれでも「山田白滝」伝説との共通性は認められる。「或時代の村々の空蔵階級にとつて、所謂高嶺の花が散つてモクゾの下になるといふことが、愉快なる空想である」と、名前や形態の変化があつても同種からの発生であると認め、山田白滝から、もくずや空蔵に変形した²⁾とされるが、この説には異論も存在する。

以上、柳田の意見においても「山田白滝」伝説は、歌、地名、登場人物といった共通の要素をもち、さまざまな形に変化を遂げ、日本の各地へ伝播されていったことがみられる。これはこの話のもつおもしろさ、特に階層の低い者が身分の高い者を歌の功德によつて妻にとつて高嶺の花を得ることが共感を呼び、広められたとみてよからう。このような柳田説に対し、白田はその「山田白滝」の中でどのような考えを示しているかを検討してみ

よう。

二 白田甚五郎の「山田白滝」

白田は特にこの中で、特に歌について注目し、「歌をかけ歌をとくとは、言問いの形式において、謎をかけ謎を解く謎の遊びに似ている。それらはいずれも本来歌の呪力を争うわざであった。「山田白滝」譚は、男女が歌を闘わず点に、伝承性の深い物語である。²²」と述べ、「山田白滝」は、柳田同様に歌が中心に語られていることを指摘し、その話核となった歌について、『日本昔話集成²³』をもとにして、四例を北から南へ掲げ、この歌を三類型に分類している。この四例を表としたものが（資料三―一）、これに載せられていない柳田の「山田の露」やその他の「山田白滝」の話のなかの歌を（資料三―二）、桐生地域の伝説を（資料三―三）、栗花落家の伝説を（資料三―四）、口説節に取り入れられている歌を（資料三―五）の表にして、それぞれの歌の主題を白田説により、Aは咲く花、塵、Bは塔、鳥、Cは山田、白滝の三類型として分類を試みた。その結果を集計したのが（資料四）の表である。

この表に示すように、圧倒的に多いのはAの例で分布地域も全国的である。BとCは少数で分布は東日本に多いが、西日本にもみられる。Cは栗花落家の伝説と、それを主として伝播したと思われる桐生地域を除けば、きわめて少数である。しかし、岩手県・宮城県・山形県・新潟県や遠く離れた鹿児島県下甕島にも同型と思われるのが見られるのも奇異な現象である。ここにもこの伝播の奇妙性を歌が示してくれるのである。

資料三 - 一

山田白滝伝説の比較（臼田甚五郎の「山田白滝」40例）

番号	場所	男	女	中将姫 との関連	歌の分類	
					男	女
1	青森県黒石市	便所掃除のごもく	殿様の姫 初花		A 1	
2	青森県八戸市	小僧の五もんじ	和尚の娘		A 1	
3	岩手県湯口村	酒屋の若者	酒屋の娘		B 1	B 1
4	岩手県矢沢村	五目	長者の娘		A 1	A 1
5	岩手県更木村	庭掃き五目	長者の娘		A 1	A 1
6	岩手県遠野市	草取りの若者の空太郎	長者の娘咲く花		A 1	A 1
7	宮城県十五浜村	廻符持の山田	十二妃の白滝		C 1	C 1
8	福島県山都町	庄屋の奉公人	庄屋の娘咲く花		A 1	A 1
9	埼玉県新倉村	猿米屋の庭掃き猿	米屋の娘小桜		A 1	
10	埼玉県入間川町	番頭の九蔵	大尽の一人娘水仙		A 1	A 1
11	新潟県葛巻村	若衆	旦那の姫白滝		C 1	
12	同上	若衆のもくず	旦那の娘咲く花		A 1	A 1
13	新潟県佐渡高千村	炭焼五郎兵衛	妃白滝姫		C 1	
14	新潟県佐渡畑野町	貧乏な三番目の弟	殿様の十二妃の一人		B 1	B 1
15	石川県珠洲市	番頭のごもく	旦那の娘初花		A 1	A 1
16	石川県柳田村	奉公人の五目之助	旦那の娘藤姫		A 1	A 1
17	石川県鶴川村	庭掃きの四郎右衛門	禁裏の姫中将姫	あり	B 1	
18	長野県下伊那	召使の木の葉	主家の娘の咲く花		A 1	A 1
19	奈良県吉野	奉公人のごもく	主家の娘桜花		A 1	A 1
20	京都府和知町	酒屋の四番頭の空蔵	酒屋の娘咲く花		A 1	A 1
21	兵庫県丹波	大百姓の奉公人空蔵	主人の娘桜花		A 1	A 1
22	兵庫県下里村	公卿の仲間の空蔵	公卿の娘咲く花		A B 2	A B 2
23	岡山県八束村	長者の下男のごもく	長者の娘咲く花		A 1	A 1
24	同上	胡鳥といわれる小男	大身上の欲張者の娘		B 1	B 1
25	広島県津名村	大分限者の下男	大分限者の姉娘初花		A 1	A 1
26	広島県御野村	商家の小僧	旦那の娘咲く花		A 1	A 1
27	広島県矢野村	空蔵	娘咲く花		A 1	A 1
28	鳥取県東伯町	三番男衆の五空	長者の姫咲く花		A 1	A 1
29	徳島県三縄村	ごもく	娘咲く花		A 1	A 1
30	徳島県西祖谷村	空蔵	長者の姫咲く花		A 1	A 1
31	徳島県一宇村	奉公人の空蔵	庄屋の娘			
32	香川県善通寺町	召使の空蔵	娘咲く花		A 1	A 1
33	香川県柳島	王様の年男の空蔵	十二妃のさく花		A 1	A 1
34	長崎県壱岐郡	番頭の空蔵	大店の娘咲く花		A 1	A 1
35	長崎県小浜町	ごもく	娘桜花		A 1	
36	同上	ごもく	主人の娘			
37	熊本県某地	三番目の番頭	娘			
38	熊本県玉名郡	中間のごもく	姫咲く花		A 1	A 1
39	鹿児島県下甕島	山田の子	殿様の姫白滝姫		B C 1	
40	同上	庭の草取りの百姓	殿様の奥方		A 1	A 1

資料三 - 二

上記以外の「山田白滝」の伝説

出典	場所	男	女	中将姫 との関連	歌の分類	
					男	女
柳	千葉県山武郡	孫三郎	清滝姫			
柳	岩手県山田町	山田左内	官女清滝		C 1	C 1
柳	新潟県南蒲原郡	モクス	白滝姫		A C 2	A 1
甲	山梨県	木蔵	長者の娘 お花		A 1	A 1
甲	山梨県	小佐治	大名の娘 玉の井		B 1	A B 1
備	岡山県神庭町	五空	長者の娘		A 1	A 1
羽	山形県東根市	若者	豪家の娘		C 1	C 1
飽	山形県松山町	空蔵	松山の殿様の娘 咲く花		A 1	A 1

柳は柳田国男の「山田の露」 甲は『甲州昔話集』 備は『奥備中の昔話』 羽は『羽前の昔話』
飽は『飽海郡昔話集』による

資料三 - 三

桐生の機神伝説と上州の民話

番号	話のある場所	男	女	中将姫 との関連	歌の分類	
					男	女
ア	群馬県桐生市	山田夫	横萩右大臣次女白滝の前	あり	B C 2	B C 2
イ	同	山田夫	白滝姫		C 1	C 1
ウ	同	山田某	白滝姫	あり	C 1	C 1
エ	同	山田舎人	四条左大臣三女白滝姫		C 1	C 1
オ	同	山田奴	白滝姫		C 1	A 1

資料三 - 四

栗花落家の伝説

掲載する書名	刊行年	男	女	中将姫 との関連	歌の分類	
					男	女
京童跡追	1667	墜栗花利左衛門	白滝の前	あり	C 1	C 1
摂陽群談	1701	山田左衛門尉真勝	白滝姫	あり	C 1	C 1
本朝世事談	1733	山田左衛門真勝	白滝姫	あり	C 1	C 1
摂津名所図会	1796	山田郡司真勝	白滝姫	あり	C 1	C 1
山田村郷土誌	1918	山田左衛門真勝	白滝姫	あり	C 1	C 1

資料三 - 五

踊りに取り入れられた「山田白滝」

出典		男	女	中将姫 との関連	
白	京都市左京区	やまだのぶにん	しら竹こじょろ だいいり		花笠踊 こいの踊
白	踊番付六拾巻番	山田のぶ人	しら竹小女ろ だいいり		こいの踊り
白	大阪地方	山田の谷 りざへもん	しらたき	あり	兵庫口説 甚九節
柳	岡山県白石島	山田の谷 治左衛門	白滝	あり	盆踊 山田の露

神戸市北山町周辺の歌

書名	歌
京童跡追	雲たにもかから嶺の白滝をさのみな恋ひそ山田おのこよ 水無月のいな葉の末もこかるゝに山田に落よしら滝の前
摂陽群談	雲たにも懸ぬ嶺の白滝をさのみな恋そ山田男よ 水無月の稲葉の末のこがるゝに山田に落よ白滝の水
本朝世事談	雲たにもかゝらぬ嶺の白滝をさのみなこひそ山田男よ 水無月の稲葉の末のこかるゝに山田に落ちよ白滝の水
摂津名所図絵	水無月の稲葉の露もこかるゝに雲井をおちぬ白滝の糸 雲井からついにはおつる白滝をさのみな恋そ山田男よ
山田郡郷土誌	水無月の稲葉の末もこがるるに山田に落よ白滝の水 雲たにもかからぬ峯の白滝をさのみな恋ぞ山田おのこよ

資料 四

「山田白滝」の歌の類型の計

類 型	男			女		
	A	B	C	A	B	C
臼田氏の40例	29	5.5	4.5	25	3	1
その他 8例	4	1	2	4.5	0.5	2
桐生地域 6例	0	1	6	1	1	5
神戸北山 5例	0		5		0	5
踊り 5例	0	3	2		3	2
合計	33	10.5	19.5	30.5	7.5	15

歌の要素が両方あるものについては0.5とした。

例数と数の合わないのは、歌がないもの、或いは2首あるものなどが有るためである。

歌の伝播に興味を示される事例として、桐生の伝説のなかの上州民話の歌がある。

須弥山の山より高く咲く花を 心かけるな山田やつこ奴

この歌は、歌の類型としてはA型で、桐生地域で見られる歌としてA型に入るものはこの歌のみである。しかし、『全国昔話集成一六』の「甲州昔話集」に載せられている木蔵お花の話の歌²⁴、

スミセンの山にも咲きしこの花は 心をかけるな庭の木蔵

これに対し木蔵は、

スミセンの山にも咲きし花なれど 落ちれば我が手の下に住むなり

と答えてお花を嫁にしたという話の歌などはA型の典型的な歌で、この話では「スミセン」という山は日本でもあらゆる山である」と語られるが、上州民話の歌と共通するものと考えられる。さらに臼田が先に蒐集した中にも、岩手県遠野市上郷町の歌が、

しうせんの山にさきたるさくはな 杓太郎ごときはおよびなす

しうせんの山にさきたるさくはな ちりねばもくだの下になるらん

また、長崎県の小浜町の

須弥山の山より高き桜花 散ればごもくの下になりけり^{*}。

というごもくの歌も同様に共通した歌と捉えられよう。こうして北から岩手県、群馬県、山梨県、長崎県というように、遠く離れた土地々々にほぼ共通する歌が存在している。

しかし、上州民話がやはり山田奴という形を取り、他の地方では木蔵、杓太郎、ごもくというような名になり、又、話の内容もそれぞれ異なっている。特に山田奴の返しの歌が、

日照りにて山田の稲も枯れ果つる 落ちて流れよ白滝の水

と、C型に属する歌であり、上州民話は都と地形が似ているのから「仁田山」とか「小倉」とかの地名を付けたと語り、歌に共通性は認められても、話の内容には独立性が認められるのも土地々々の事情に応じて話が形成され、変化がなされていったことを示すものとして、ここらにも昔話の作成過程の一端が伺えるような気もする。

白田は又、これらの話の中の男の名にはごもくともくぞうとが多い²⁾と述べるが、これらを上記の歌についての結果を(資料五)に示すと、やはり多いのは五杵(ごもく)であり、西日本には杵蔵系が多く、山田という名はごく一部にしかみられない。白田はごもく系が日本全国に渡っているが、杵蔵系はほとんど近畿以西に限られている。杵蔵の方が南北各地に先行してひろがり、ごもくが駆逐したのならば、杵蔵がもつと東北地方に見出されてもよからう。杵蔵は、はっきりと西日本に限られており、特別にこの話を西日本に運び込んだものがいたのではないか。さらに庭掃きの下男が生まれ出る土地としては、山間の僻地が適当で、一般的に山田という地名が考えられる。そこから男の名になっていったので、男の名を山田とするのは後の案に違いない^{*}。と述べ、ごもく系・杵蔵系が山田系に先行すると捉えているが、これは先述の柳田の説と対照的である。これについては他の「山田白滝」などの話についても検討した上で、最後で考えを述べたい。一方、女の名には咲く花が多く、その他、

桜花とか初花、藤姫など花に類するものが多くみられ、花が美しい女性を意味するものとして使われているのであろう。確かに白滝はごく一部にしかみられない。

桐生地域には山田白滝の系統としてほぼまとまった形で伝わり、ここに伝説の一定の伝播ルートが存在が予測され、桐生の諸伝説にはその話の内容から栗花落家の伝説の色が濃いことが伺われるので、摂津の栗花落家の伝

資料 五

山田白滝の男女名

地方	県名	数	男の名				女の名		
			ごもく	空蔵	山田	その他	白滝	咲く花	その他
東北	青森	2	2						
	岩手	5	2	1	1				
	宮城	1			1		1		
	山形	2		1					
	福島	1							
計		11	4	2	2		1		
関東	埼玉	2				1			
	千葉	1				1			1
計		3				2		1	
北陸	新潟	5	2			1	3		
	石川	3	2			1		1	1
計		8	4			2	3	1	
中部	山梨	2		1		1		1	1
	長野	1				1		1	
計		3		1		2		2	
近畿	奈良	1							1
	京都	1		1				1	
	兵庫	2		2				1	
計		4		3				2	
中国	岡山	3	2						
	広島	3		1					
	鳥取	1							
計		7	2	1					
四国	徳島	3	2	1					
	香川	2		2				1	
計		5	2	3				1	
九州	長崎	3	2	1					
	熊本	2	1						
	鹿児島	2			1		1		
計		7	3	1	1		1		
合計		48	15	11	3	6	5	6	4
桐生		5			5		5		
栗花落		5			4	1	5		
踊り		5			3	2	5		

説について考えてみよう。

三 栗花落家伝説

この伝説は発生の地を摂津国矢田郡丹生山田庄原野村と伝えているが、此の地は現在、神戸市北区に含まれ、六甲山の北側にあたり、最近まで開発が余り進められていなかった静かな農村地域である。

現在も弁財天を祀る祠があり、その前に栗花落の井戸も存在している。祠の後の叢のなかに宝篋印塔も残されていたが、文字も読めず、時代も何者の墓なのかも確認は出来なかった。『摂陽群談²⁾』の第九に「白滝姫塔 矢田郡丹生山田庄原野村、栗花落理左衛門第宅にあり」との記事が見られ、『山田村郷土誌³⁾』にも「祠後の五輪塔は真勝の墳なり」という記事が載せられるが、それらを明らかにしうるものは見いだせなかった。

この伝説を伝えている書物は（資料六）の如く、江戸時代に出版された四種と、さらに大正時代に出された『山田村郷土誌⁴⁾』がある。この記が最初に見出されるのは寛文七年（一六六七）に刊行された中川喜雲の『京童』の補遺版『京童跡追』第六³⁾に「白滝前」と題して載せられているが、ついで出された元禄一四年（一七〇九）刊の岡田奚志の『摂陽群談』の巻第八の梅雨井の項には³⁾、かなり詳細に真勝が白滝姫を得るロマンスの話が載せられ、帝から天国の御剣を賜るの記事もみられる。享保一八年（一七三三）の菊岡沽涼の『本朝世事談』巻四歳時門の入梅の井の項³⁾にもは『摂陽群談』とほぼ同様の内容がみられるが、その後に出された寛政八年（一七九六）刊、籬島秋里著の『摂津名所図会³⁾』の矢田郡下には、白滝弁天祠、栗花落井、相伝として、

書籍名	発行年	作者	場所	天皇	男	女	御剣を 賜る	中將姫 関連
京童跡追 第六	一六六七	中川喜雲	摂津国矢郡田部郡丹生山田庄原野村	淳仁	墜栗花利左衛門	右大臣豊成公息女 白滝の前	あり	あり
摂陽群談 卷八	一七一	岡田 志	矢田郡丹生山田庄原野村	淳仁	山田左衛門尉真勝	横萩右大臣豊成郷息女 白滝姫	あり	あり
本朝世事談 卷四	一七三三	菊岡沽涼	摂州矢田郡丹生山田庄原野邑	淳仁	山田左衛門真勝	横萩右大臣豊成娘 白滝姫	あり	あり
摂津名所図会矢田部郡下	一七九六	籬島秋里	丹生山田庄	淳仁	山田郡司真勝	横萩右大臣豊成公息女 白滝姫	あり	あり
山田村郷土誌	一九一八		丹生山田庄	淳仁	山田左衛門真勝	横佩大納言豊成郷息女 白滝姫	あり	あり

栗花落家の伝説中の歌及び故事

書名	歌	歌の分類	井戸・弁財天の故事
京童跡追	雲たにもかから嶺の白滝をさのみな恋ひそ山田おのこよ 水無月のいな葉の末もこがるゝに山田に落よしら滝の前	女 C 男 C	弁財天を祝い五月に水の涌きいずる所の上にある
摂陽群談	雲たにも懸ぬ嶺の白滝をさのみな恋そ山田男よ 水無月の稲葉の末のこがるゝに山田に落よ白滝の水	女 C 男 C	梅雨に入て必涌す。白滝世を早す。遺骸を終に納蔵て、 叢祠と成し、弁財天を祀る
本朝世事談	雲たにもかゝらぬ嶺の白滝をさのみなこひそ山田男よ 水無月の稲葉の末のこがるゝに山田に落ちよ白滝の水	女 C 男 C	梅雨に入て必ず湧出す。白滝姫世を去る。遺骸を東の境 葬り、その蔵す所を叢祠となし弁財天を祀る
摂津名所図絵	水無月の稲葉の露もこかるゝに雲井をおちぬ白滝の糸 雲井からついにほおつる白滝をさのみな恋そ山田男よ	男 C 女 C	白滝姫死ぬ。東境に葬りて廟塔を建けるに栗花落ける頃 霊前より名泉涌出る。詔有て白滝姫を弁財天と崇める
山田郡郷土誌	水無月の稲葉の末もこがるるに山田に落よ白滝の水 雲たにもかからぬ峯の白滝をさのみな恋ぞ山田おのこよ	男 C 女 C	俄然として逝く。助命により廟後に弁財天の祠を籬建つ 栗花おつる比清水涌沸として出す。

この話について書かれ（資料六）に示したように、前記の三書は姫の歌に男の方が答える形式にであるのに比べ、先ず歌を真勝が送り、白滝姫が答えるという反対の構成をとっている。歌も前記の三種がほぼ同様であるのに対し、若干異り、作者の新しい意図の試みとも受け取られよう。

又、大正九年（一九二〇）年に出版されている『山田村郷土誌』では「連の裔矢田部郡司長子左衛門佐真次年四十にして嗣子なし、丹生山の千住観音に祈り真勝を生む、之を山田左衛門尉と称す。真勝四十七代廢帝に奉仕す。」³⁵とし、真勝が千手観音の申し子であることを除けば、記事の内容は『撰津名所図会』と類似しており、之を念頭にして作成されたものであろうか。白田は『山田村郷土誌』の水無月と雲たにも歌の順序が逆になっていると指摘し³⁶、土地の人でも伝承を錯覚としていると述べているが、既にその構成は『撰津名所図会』に見られ、『山田村郷土誌』もその例を用いて書いたのではないだろうか。

柳田は「家の傍に弁財天の社があつて、そこに栗の花が落ちる五月雨の頃になると、新たに湧き出る不思議の泉があり、これを説明するために貴女降下の伝説があつたことは、夙く京洛の地に知られていたようだが、これを中将姫の妹といい、もしくは名歌の奇特によつて、無謀なる妻問いに成功したという話までが、初めから之に伴うであつたものとは認められぬ」と語り、「この間には二度以上の増補がなされている」と述べ、そして、このような泉の奇瑞は曾根崎の露天神社を始めとして各地に存在し、又、家の先祖と水の神の婚姻の例も著名な伝説であるので省略し、新しい修飾を必要とし、家伝では物足らず、高い謂われを求めていた時に、この地に伝わった説話と結び付いて出来たのであり、関東や奥州の山田の土地にて土着した事情も同じであつたらうという³⁷。確かに歌によつてよい女房を得た話など古い伝説は多く存在し、こうしたものを土台にして幾度かの増補が成されてこのような伝説が構成されていったというのが柳田の考えであり、伝説の構成については尤もな説だと思え

る。

白田は白滝姫が弁財天として祀られ、前記の『摂陽群談』の白滝姫塔記事からも「弁財天の祠ばかりでなく、白滝塔の如きものが建てられたからには、唱導教化の力が強く集中したことが察せられる。なるほど当麻寺系統の女流唱導家がやってきたに違いあるまい³⁾。」と述べているが、これらの伝説の伝播者については後でもう一度考えてみたい。

また、こうした「山田白滝」伝説は、各地の口説節の筋にも取り入れられ踊りの詞章に用いられているので、それらについても見ていこう。

四 各地の口説節のなかにみられる「山田白滝」

柳田は「山田の露」の冒頭で、昭和五年（一九二〇）の郷土舞踊大会における備中白石島の盆⁴⁾踊「山田の露」を取り上げ、播州の故郷で聞いたものと筋が同じであるが、言葉が少し変わっていると述べ、兵庫踊の名を以て此物語の流布していたのは、百年の昔のことであると⁴⁾、この文句が古くから口説節に取り上げられ、現在も踊り継がれていることに驚きの目を向けられている。又、白田は白石島の盆踊は源平合戦の死者をこの島に葬り、その亡霊を慰めるため始まったと伝えられているが、兵庫くどきの「山田の露」は享保時代からであろうとされている⁴⁾。

村上省吾の著『兵庫口説』には、当時の大阪の盆踊り歌謡は元禄年間の道念節、半九郎節、えびや節が衰微す

ると、これに代わって兵庫口説が大阪地区に流行し、やがて関西一帯、紀伊、兵庫、姫路、広島、山口、そして九州、四国へと広い範囲に及んだ。しかし、京都以東へは、まだ鉄仙流、京音頭が流行しており、東漸の余地はなかったと述べ、流行年代は享保（文化文政（一七二〇—一八一〇）、元文（寛政（一七四〇—一八〇〇）の二説があつて、他の歌謡に比べて流行年代が長いのが特徴とされ、人形浄瑠璃の宣伝用としても用いており、内容が当時の民衆の意向を反映している為、関西一円の盆踊り唄として戦前まで愛誦され続けられてきたと述べられる⁴³。

これら兵庫口説のなかの「山田のつゆ」の版本の表紙には「はやり音頭ひやうこふし⁴⁴」と記されたものが残されており、前記の栗花落理左衛門と白滝姫の話を取文句として音頭化したものである。音頭のなかの歌は

雲谷の濁りかからぬこの白滝を心なかけそ山田の男

水無月の稲葉の露と焦がれつつ山田に落ちよ白滝の水

と唄われ、前記に掲げた諸本によつて若干の違いが認められるが、姫の歌が先行し、男が返歌する形は、『京童跡追』、『撰陽群談』、『本朝世事談』の系統で、おそらく『撰陽群談』を元にして作られたものであるうか。臼田は「豊後屋版兵庫くどき」と「白石島盆踊」との詞章を比較し、殆どそっくりなのに驚ろいている。しかし、全く相違が無いわけではなく、伝承される間に少しづつ変化されていったのだと思われるところもある。主人公の出身地はいずれも津の国山田の谷で、登場する主人公の名も盆踊り唄は治左衛門、口説の版本ではりざえもんとしており⁴⁵、これらは各地に伝承した昔話には殆ど見いだせない名で、『兵庫口説』は栗花落家の伝説を素材に作られたことが立証できると思う。さらに臼田は「山田白滝」の間に交わす歌のやりとりが池河内の御神事太鼓踊の一曲に見出れると、池河内の太鼓踊りを紹介している⁴⁶。

池河内は敦賀市の東方の山間部落であり、御神事太鼓⁴踊は氏神諏訪神社の祭礼に奉納される。そのささら踊のなかの「しらたけ」は「山田白滝」を題材にしたものであるが、これと同じような踊りが京都の鞍馬の奥の「山城久多の燈籠踊⁴」のなかの「こいの踊り」にも見出され、これにもやはり「山田白滝」を素材にした歌のやりとりが残されている⁴。この二つの歌と前記の兵庫口説きの歌を比較してみると、後者の歌のなかには中将姫に関連する文句は見いだせない。又、池河内の踊歌では白滝が「九重の塔と思う我が身を」とかけ、山田が「鳥や烏と身をなして、九重の塔の上になりたや」と言う文句は、これは歌の類型ではB型に該当するものであり、山田の「山田ぶじんの歌にしかれて、今宵は落ちよ内裏白滝」という歌はCの型に属すると思われる、この踊歌にはBとCの二つの歌の要素を見出される。しかし、これらには中将姫の文句が見いだせないところから、兵庫口説と太鼓踊りや燈籠踊りとは、同じ口説節の歌として伝えられてはいるが、それぞれ異なったルートによって傳播がなされたと考えてよいのではないだろうか。久多の燈籠踊りと池河内の太鼓踊りはほぼ似た構成が示されるから、流布は同一の系統であったかと想像されうる。

このように流布の系統が違つていても「山田白滝」伝説が現在に至るまで踊りの誦句に用いられているのは、話の筋が面白く、内容が一般民衆の共感を得るものとして、もてはやされるものであったことが理解できよう。こうした数々の「山田白滝」の伝説や昔話、口説節の中にも、中将姫説話との関わりを示すものがみられ、中将姫の説話がこれらの作成に影響を与えていると推察できるので、最後に中将姫説話の発生と流布の過程にも触れておく。

五 中将姫説話の発展と流布の過程

前記の栗花落家の伝説は、いずれも白滝姫を中将姫の妹と設定しており、桐生の機神伝説にもこれと同様な中将姫と関連する伝説が存在している。これらに挿入されている中将姫説話について、その発生、流布の過程を考えてみたい。

中将姫説話のもとになるのは、当麻寺の厨子に本尊として掲げられている「当麻曼陀羅図⁵⁰」である。「当麻曼陀羅縁起絵巻⁵¹」には観音の扮する化女と共に蓮の茎糸で曼陀羅を織る中将姫の姿が描かれ、一夜にして曼陀羅を織りあげたと絵巻は述べる。建長六年（一二五四）に成立した『古今著聞集⁵²』にもそのような話が記されているが、中将姫という名称は用いられていない。しかし、五来重は『寺社縁起からお伽話へ』の中で、『一遍聖絵』には「本願中将の妃」と記され、これが弘安九年（一二八六）の作であるとされるから、既に一三世紀の終わりには中将姫の説話的なものが誕生していたと見てよいと述べている⁵³。やがてその説話は絵巻や掛幅繪として描かれるようになり、それが絵解きとして利用され浄土系の僧侶たちなどによって極楽浄土への往生を説く浄土信仰の流布に用いられていく。現在も行われる二十五菩薩来迎とよばれる練り供養の菩薩面に鎌倉時代の作もあり、既に鎌倉時代から行われたといわれるが⁵⁴、浄土信仰が盛んになり、中将姫説話の浸透とともに、現在のようない姿に調えられていったものであろう。

中世以降の芸能の発展は、中将姫説話を題材とし、いずれも世阿家作と伝えられる謡曲の「当麻」や「雲雀山」を生み⁵⁵、それを元にお伽草子の「中将姫の本地」が作られ、女人往生を唱え、庶民を引きつけるような作品の誕生をみ、中将姫説話は広く諸国に流布されるようになる⁵⁶。

中将姫説話が流布され、民衆に広く受容され、前記の粟花落家伝説にも白滝姫を中将姫の妹として、高貴な美しい女性のイメージをえがいて構成されたものであろう。

柳田は「山田の露」で、「是を当麻の中将姫の妹ということから、多分は専門の歌比丘尼の所作であつたろうと想像する。斯ういう女性の神気が副うて語ることは、事実又大抵の田舎人には信用せられたのであつた⁵⁷」とこの伝説の流布について歌比丘尼説を立てている。それに対し、白田は前述のように中将姫との関連から、当麻寺関係の布教者がこの伝説の伝播に關与したとの説を打ち出している⁵⁸。確かに源信以来の浄土教の発展に加え、一般大衆に極楽浄土往生の可能性を約束した浄土教の信仰は、こうした説話により、一層身近になり、一般庶民層に波及し、「山田白滝」伝説の中にも挿入されることになつたのであろう。これらについて、宗教者が伝説の流布に關係していたことは想像されるが、しかし、「山田白滝」の伝説のなかでは中将姫説話が挿入がされるものは全国的にはごく一部であり、その他にもこの話を流布させていった者の存在があると想像されよう。中世末には、多くの職能民や芸能民が発生し、各地を巡回しており⁵⁹、そういった者の中にこれらの話を伝え歩いたような者の存在を考へることが出来るのではないか。『昔話の発生と伝播』でも、中世の物語の伝播の主役は、説教僧・連歌師・茶人に至る系譜の中にあるが、彼ら以外にも職人たちが成立しつつあつた鄉村社会で、村々の古老の旧聞に刺激を与え、家ごとの昔物語の語り手に話材を届け、又、旅先で珍しい話を仕入れ、各地に拡散したと述べられている⁶⁰。「山田白滝」の話もこのようにして日本国中に広く分布され、その土地々々に応じた脚色が行われ、それが全国の各地に現在でも昔話として残されていると考へたい。

こうして「山田白滝」の伝説は色々な形で各地に伝わつていったことを見てきた。そして桐生に伝わつた伝説はそれらの伝播を受け、地元で装いを調べ、新たな桐生の機神伝説を生みだした。そうした桐生における機神伝

説の種々の「山田白滝」との共通性と独自性について考えてみることにする。

第三章 桐生における機神伝説

一 「山田白滝」伝説との共通性

以上様々な形での「山田白滝」伝説の流布の過程を見てきた。多種のルートをたどり、形を変えながら多くの地域では昔話となり、また、口説節のような踊りの詞章となつて流布されていったが、それらと桐生における機神伝説はどの様な共通性が見いだせるのであろうか。

先ず、これらの伝説は殆ど女が歌を出し、それに男が歌をつけその優劣を競い、その結果、男の勝利によつて妻を得るというパターンで、女性は共通して姫とか長者の娘とか身分が高く、男の方は召使いとか庭掃除人とか、はるかに身分が低く屑のような存在が、優れた歌を詠み、高貴な女性を妻に得るのであり、一般的には女が歌を出し、それに男が答える形である。これらの要素は桐生の機神伝説も同様である。白田は「時代を超えて、婚姻の伝統は、男女のよばひに存するのである。男は女の胸を打つやうに、女は男の胸をはね返すやうに、言霊を言葉にこめて歌ひかけるのであつた⁶¹」云つてはいるが、白滝姫も帝や父の言葉に従つて遠国へ下ることになるのだ

が、山田おのこの歌に心を打たれ、この遠い土地に下り、根付くことになったと思われ、歌が人の心を打つものであるという古来からの伝統が、この機神伝説にもみられると考える。

アの縁起⁶²は、仁田山郷天神縁起と称されるが、安永三年（一七七四）に出されている『上野国志⁶³』には「絹織天神という社あり、これ絹布を守る神なり」と記され、天明二年（一七八二）に桐生を訪れた高山彦九郎の『沢入道能記⁶⁴』に、「桐生の奥仁田山に機織天神と号し、官女まつりあるかやと承る」と記し、当時、白滝姫は機織天神として信仰されており、既に機神としての存在が知られていたことが理解できる。

この縁起の前半部分は栗花落家伝説とほぼ同様な構成で、白瀧姫を横萩右大臣豊成の次女、当麻中将姫の妹としており、栗花落家伝説に基づいて作成したと思われるが、仔細に見ていくと掲げられている歌の内、始めの二首の歌は、前述の歌の類型ではB類に属し、栗花落家の伝説にも、桐生における他の伝説でもB類に属する歌は見いだせない。又、「替わりの夫共上りければ、御いとま下さるゝの折節、此度夫共に何にても望み次第に御料理下さるゝ由、綸言あり、関東の夫共、餅・酒・蕎麦切・其他思ひ思ひに御願ひ申上る」の段は、「難題聲」に多くみられるパターンで、柳田も「三人の下男が三段に其望みを語って、その最後の者が殊に重要であり又適切であったといふ点は、兵庫踊りの「山田の露」からは既に落ちて居たようだが、是などは確かに古い形である^{*10}」と述べ、又、白田は食欲と禁欲と色欲の三様が揃った形が「山田白滝」譚の一連列で、慾といへば聞えは悪いけれど色慾には頭のはたらきをためされる関所でいやしいものではなく、風雅の才の試煉といふ形は、他の「難題聲」譚よりも婚姻の民俗が伝へられている⁶⁵と語っている。このような話の形は栗花落家の伝説には見いだせないから、昔話「山田白滝」の形態が用いられていると見てよいだろう。

又、ウの機神白瀧姫御神影竝御傳記⁶⁷は『摂津名所図会⁶⁸』に由来して作成されたと伝えられているが、両者

を比較すると、前半部分の白滝姫を妻に下される所までは、帝より名剣を賜うところを除けば、殆ど同じような構成で、歌に至っては全く同じ歌が載せられてから、ウは明らかに『撰津名所図会』を下敷きにして作成されたものである。後の二つの伝説イとエも、姫を妻に下され本国へ帰る部分までは、これもほぼ栗花落家の伝説に似通った構成を示している。

こうしてみていくと、桐生の機神伝説は、主として栗花落家の伝説に由来して作られてはいるが、ただ、アの縁起には「山田白滝」の昔話に類する話のモチーフが用いられているので、栗花落家伝説以外の「山田白滝」に関連する伝説・昔話なども桐生に伝播していたことが想像でき、それらも加えて、機神伝説が作られていったといえるが、これらの何れの機神伝説の後半部では白滝姫が糸機を里人に教え、その死後、機神として祀られるといったような構成をとり、それらは全く桐生独自の発想で、これが機神伝説の特徴となる。こうした機神伝説の独自性の発生の過程を探ってみたい。

二 機神伝説の独自性の発生

機神伝説には、前記のように栗花落家の伝説や昔話「山田白滝」との共通性も認められるが、しかし、桐生の諸伝説は明らかに白滝姫を機神とし、それを信仰の中心に据えて縁起や伝記が作成されている。

まず、アの縁起をみると、その冒頭に「抑平安城は、人皇五十代桓武帝延暦十三年長岡の京より、この地江移し給う、今に至るまで連綿たり」時期を桓武天皇の年代に設定している。栗花落家伝説はすべて淡路廢帝淳仁天

皇時代としており、これに比して、平安時代を幕開けした桓武天皇を登場させたことは、明らかにこの時代にあやかり、桐生の織物の進展を願う神として、華々しい平安時代の幕開けを創出した天皇の時代をを想定し書き出しに用いたものであるう。こんな所にも機神として、桐生の織物業の発展を願おうとの意図が込められているような気がする。また、朝廷に絹を献上し、富貴栄華の土地になったとし、幕府に絹を代永として差し出しを「此の時分より始まりける」としている。これは家康に旗絹を献上し、合戦が勝利に結び付いた故事にちなみ、絹を献上し、やがてそれが金納となり、桐生独自の小物成として、桐生の近世における独自の恩恵をうける源となり、桐生の発展に大きく貢献したとされる「絹永⁶⁹」を持ち出し発展の原因を語っている。この機神伝説は、こうした時代や歴史を念頭にして構成がなされている。

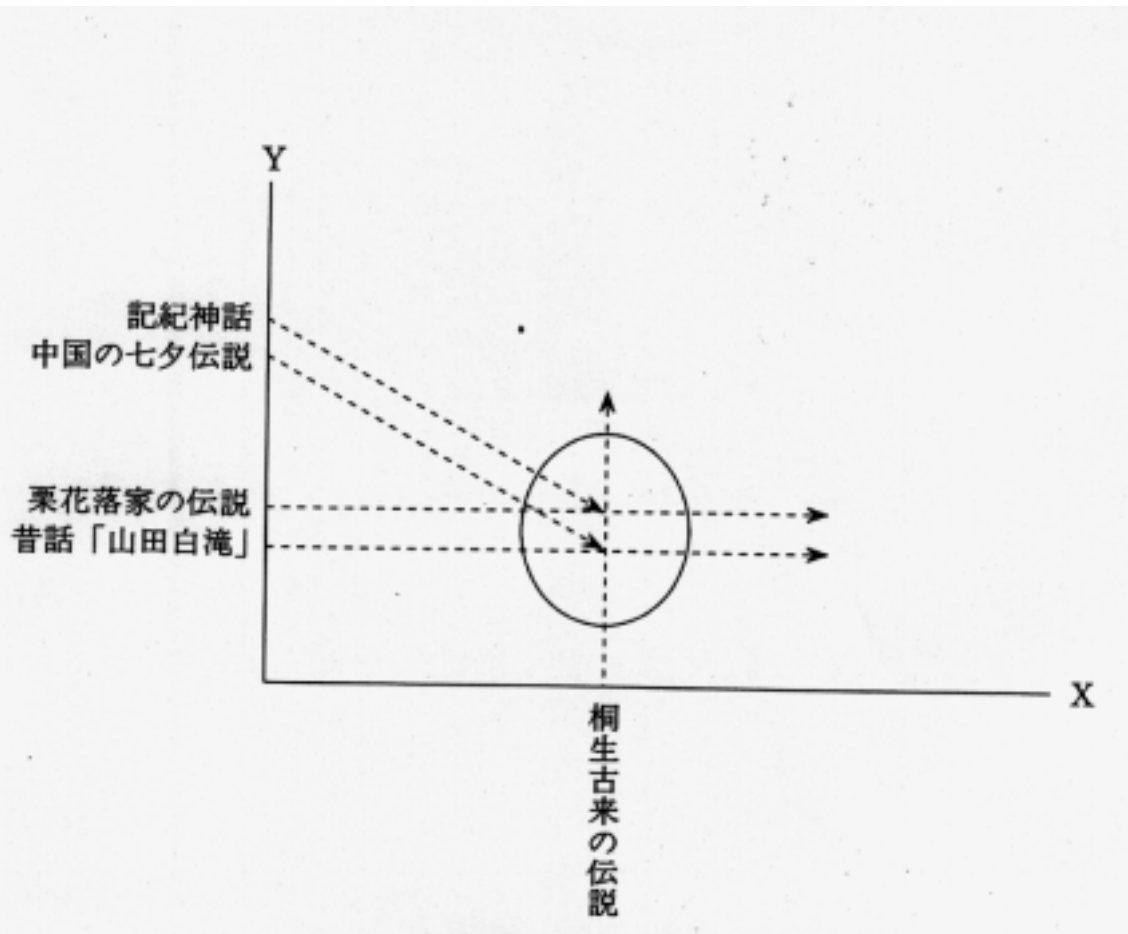
更に、ウとその作成の下敷きになったという『撰津名所図会』を比較すれば、前半部分はほぼ同じであるが、後半部分において全く新しい話が加えられ、白滝姫は糸機の名人であり、機神として崇め、桐生の織物業の繁昌も白滝姫の神恩によるものとして、白滝姫を機神として祭り、その恩恵を被って桐生織物業の興隆を願おうとする意図が加わっている。そして「享保・元文の頃迄は尋常の絹をのみ、織りたるに、京都より、弥兵衛・吉兵衛杯云う者来りて、飛紗綾を織ることを教えしより、次第次第に上手になり、縮緬・綸子・綾錦迄も、織出すようになりたる事、其源は、白滝姫の最も尊き神恩也」と、近世以降の桐生の織物業の過程を述べ、それらを白滝姫の神恩としている。ここにもはっきりと桐生の機神伝説誕生の独自性が伺える。しかもウの伝記には一見、中将姫説話には全く触れられていないようにみえるが、書かれている年号、天平宝字丑歳こそは中将姫が当麻寺に入寺した年⁷⁰であり、そこには中将姫を意識し、蓮の糸で当麻曼陀羅を創作したと伝えられる中将姫の姿を念頭におきながら、この美しい白滝姫の絵姿の制作がなされたのであろう。こうした面にも、明らかに『撰津名所

図会』は意識はしているが、桐生独自の白滝姫を描き出しているといいうる。そして、文の最後には中国における七夕伝説を引用し、白滝姫を織女星になぞらえ、一層織物の神としての信仰の意識を鮮明にして伝記を仕上げているあたりには独自の工夫が凝らされていることが認められよう。こうした機神としての白滝姫の姿は『撰津名所図会』を初めとする栗花落家の伝説の諸本にも、そして各地に伝わる「山田白滝」の話にも一切見あたらない。

更に工の伝記には、『古事記』における天照大神や天棚織女命（あめのたなばたひめのみこと）の故事⁷¹や、『日本書紀』に掲げられる応神天皇の御代に渡来したといわれる呉女、服女の織女の記事が見られ⁷²、白滝姫がそういった神代や古代からの織物の伝統を受け継ぐものとして描かれ、白滝姫の神格を一段と高めようとする意図も見受けられ、記紀の記事までも加えることによって、白滝姫の信仰で蒙る御利益が、ますます加えられることを強調するものとされたのであろう。

このような機神伝説の構成を図に示すと、横軸に栗花落家の諸伝説や、各地からもたらされた「山田白滝」の話があり、縦軸には、古くから伝えられている桐生独自の機神伝説を、更に中国の機神伝説や記紀神話までも加えて機神伝説の構成が成されているということが認められよう。

これらは桐生絹織物業の発展を意図して創作されたものである。勿論、栗花落家の伝説では白滝姫を弁財天として祭り、白田はこれは弁財天の縁起になっていると述べるが⁷³、それは栗花落家の守り神としての存在で、桐生の機神のように地域の信仰の対象となり、しかも機業の隆盛発展を願おうとする意図は窺えない。「山田の露」に掲載されている能登の鳳至郡鷓川村に山田という部落での伝説なども、故郷へ同道した姫が食物乏しきを憐み、海から採って来た藻を淵に投入したのが今でも繁茂し、姫は部落に祭られているという話⁷⁴には一脈通じ



図一 桐生機神伝説の成立

るものがあるが、食物を地域に授けたのであり、桐生のように産業を授けたものではない。

最後に、これらの機神伝説はどんな意図をもって桐生で作成され、利用されていったかを検討したい。

三 機神伝説の作成の意図と効用

桐生では他所とは異なる独自の見地から機神伝説が作成していった。その文字化の時期は一八世紀の中葉から一九世紀初めという桐生織物の近世における最盛の時期であつたと思われる。近世、桐生に独自の買方を派遣して、織物の買入れに当たっていた江戸の呉服問屋越後屋の「買方之条目」には「この五十六年以前より飛紗綾を織出し年増に大数織出し」とか「京都と違いその土地にて糸何程にても相調え織立候故、京都より抜群下直につき⁷⁵」というような文言がみられるが、この時代には、京都の西陣に匹敵するほどの高い技術の織物が多数生産され、しかも、生糸が地元で生産されるという利点から、安い値段で織物の生産が可能であつたことが理解できる。このような特性をもつた桐生織物を支える精神的基盤とも機神伝説はなつたであろう。

アの縁起は、「此白瀧の明神、機織神の根元也。富貴は、諸願の満てる元也。」「依而今、此国の家業糸機神白瀧大明神とうやまい奉り、あゆみをはこぶ輩には、糸絹の名人となり、御利益あるべしとなり。」と、白瀧姫の御利益を強調している。白瀧姫は、絹織物業という産業の隆盛を支える神であり、絹織物業の発展に大きな役割を果たすと共に、糸機の業に携わる者にとって、御利益を与える神でもあつたのである。

『群馬の絵馬⁷⁶』に白滝神社に奉納された二枚の絵馬が掲載されている。一枚はおだまきを手にした白滝姫と

それに短冊を献じる山田男の姿が描かれ、上に大きく「奉献」と記され、左に「明治二十八年五月 桐生織屋職
工中」と書かれ、もう一枚は、鶴に乗って大空に飛ぶ白滝姫の姿を描き、「明治二十七年二月 当所 関根氏」と記される。いずれも明治二七、八年に献納されたもので、この時期は日清戦争の前後といえる。漸く近代日本が近代国家の形を調べ、大きく海外に飛躍しようとした時期でもあった。これらの絵馬には、そうした桐生織物の発展を願う織物関係者の心が込められていると思われる。このように近代においても白滝姫は織物に關係する人たちに御利益を与える神として信仰された姿をこの絵馬にみることができる。

又、各地に現在でも歌い継がれている機織⁷唄にも

機が織れない機神様よ どうぞこの手が上るよに

機が織れない機神様よ どうぞ日機の織れるよに

機が織れない機神様よ どうぞ疵機織らぬよに

というような機神様を信仰する歌が残されている。一日も早く、一人前の織り子になりたいとの乙女の切なる願い、そして疵織物を作らないように仕事の無事を祈る気持を機神様に求めている。將に機神は技術の上達や安全を祈願する技術神であり、織り子たちの心の支えにもなる神でもあった。白滝姫はこうした御利益を生ずるに相應しい神といえよう。

ウは、更に「されば養蚕し、糸繰り、機織る人はもとより、こがいせず、機織らぬ人々とても、皆糸絹の余沢にて、桐生領其外迄も繁昌するならば、ともにともに、此御神を敬い崇むべきことなり、況や絹売買する人々は、とりわけ尊敬信心有るべきことにこそ。此桐生の市に商する人、西上州、武州、野州其外、おしなべて此の御神の御恩沢を蒙らぬはあらじ。常に御神影を祭り奉り、弥々信心有るべき也」と、桐生の地の糸絹を職業とする人

は勿論、それ以外の領民たち、そして遠くの地から絹市に集る他国の商人たちまでも御利益をもたらす神であると機神伝説は伝えているのである。

また、西陣に匹敵するような生産が可能になった優れた桐生織物の宣伝のためにも機神伝説は利用された。ウの伝記は、桐生の絹買の中核であった新居甚兵衛が、館林藩の画家で文人でもあった小寺応斎に制作を依頼したものである⁷⁸。その画面には「機神 白滝姫御神影竝御傳記 御祭禮七月七日」と記され、上部に前述の伝記が、下部に鮮やかな色彩の十二単衣を纏い、おだまきを手にもつ白滝姫の姿が描かれている。その姿は機神として気高く相応しいもので、新居家ではこれを版刷りにし、織物に巻き込んで出荷したと伝えられている。桐生の織物は、このような美しい白滝姫によって始められた由緒ある織物であると、桐生織物の優美さを宣伝に込めて利用したものであろう。このように機神伝説は、桐生織物の宣伝として大きな威力を發揮したのである。

こうした白滝姫を利用した宣伝は、近世のみでなく、近代にも行われている。明治二一年（一八八七）年に、全面的に洋式工場制度を採用し、外国製の力織機・撚糸機・整経機による一貫作業を行う日本織物株式会社が桐生に設立された⁷⁹。そして、明治二八年（一八九六）には白滝神社から祭神を勧請し、構内に織姫神社を建て鎮座祭が行われている⁸⁰。同社の主力商品として「織姫繻子」が生産され、それは当時輸入織物の王座を占めていた南京繻子に対抗して製織されたものであった⁸¹。その宣伝のため、明治二七年（一八九五）五月、明治座において「織姫繻子縁色系」（おりひめしゅすえにしのいろいと）と題する歌舞伎が上演されている。脚本が失われ筋書は不明であるが、序幕は奈良御所紅葉宴会の場として、機神伝説を元にしたものであり、本幕は松源楼宴会の場として、織姫繻子が南京繻子より優秀であるということを強調する場面であったようだ⁸³。この上演に際し、桐生の機屋呉服店から明治座へ、中央に八咫鏡、その中に白滝姫を織り出すという高価な緞帳が贈られたという

⁸₄。当時の大日本織物協会の会報に「今回明治座にて織姫神社の由来とかを演ずると聞ぬ、機屋繪具屋の連中総見物を催すとぞ、又盛なりといふべし、織姫の由来、芝居として如何に面白きや未だ見ねば知らねど、以て織姫繻子の声価を多かむる事幾等ならん」というような批評⁸₅が見受けられ、桐生ではこの公演に大きな成果を期待したかが伺われる。公演は大成功であつたようで、当時流行していた錦絵⁸₆にもその姿を残されているから、宣伝効果はかなり高かつたであらう。このような形で機神伝説は桐生織物の宣伝に利用がされ、大きな効果をもたらしてもいる。

こうして機神伝説は桐生領一円の織物業の隆盛を願う神として、その御利益は桐生領内は勿論、織物取引が及ぶ遠くの地域にまでもたらされものであつた。又、技術向上の神としても信仰され、一方では桐生織物が優美な良品であることを広く伝えるために宣伝にも利用されるものでもあつた。このように機神伝説は、桐生織物業にとってさまざまな効用をもたらし、その繁栄の一翼を担うものでもあつた。

終わりに

以上、桐生の機神伝説は、「山田白滝」伝説を元にした一連の話と共通性を持ちながら、桐生における絹織物

業のための信仰を支える伝説として、独自の形で形成されてきたことをみてきた。

昔話「山田白滝」は、それぞれ興味深い形を傳播しながら、各地に発展受容されていった過程には、中世以来の文化の傳播の一過程も伺えて興味深い。この話のなかで、柳田が「山田白滝の一例に至っては、たとへ人の名や歌の文句がこれだけちがって居るうとも、それだから別種のものだと言ひ得るひとは無く、又はくそ鳥やもくぞの下の方が、古くから有ったのだといふ者もよもやあるまい」と山田白滝の先行説を出され、それに対して白田は、山田白滝は少数であるから後案で、ごもくや杳蔵説が先行するという対立する説を出されている。私は種々の「山田白滝」に類する話などの傳播の過程などを検討して、やはり柳田説に賛成したい。確かに山田白滝は少数である。しかし、ごもくや杳蔵といった身分の低い者を登場させることで、この話は一層面白く興味あるものとして全国各地へ傳播が行われ、現在も多くの昔話の形で残されていると考えてみたい。それでもまだ飛び離れた地に山田白滝の形が散在する形で残っているのは、山田白滝型の話が先行し、それがごもくや杳蔵といった型の話へ転化が行われ、興味ある話として現在でも各地に多く残存しているのだと考えたい。そういった所から山田白滝の先行説を採る。

しかし、こうした昔話と離れて「山田白滝」伝説は、桐生においては機神伝説として成立した。それは当時、桐生織物が西陣と並ぶような高級絹織物の生産が可能になり、織物業の精神的きずなとして機神の信仰が求められたからであろう。多くの人にそれを伝える必要性をもって機神伝説は仕立てられたと考えられる。その為には、尊崇に値するものでなければならず、そこに桐生独自の様々な工夫がなされている。時代を桓武の御代に設定し、華々しい平安時代の幕開けのイメージを用いたり、或いは、『古事記』の話が登場させ、織物は神代の昔から伝わる神の成す崇高の技であり、その後裔であるというような説を用いたりしている。一方では中国の伝説になぞ

らえ、七夕の縁起を加えるなどして、神のもたらす利益の多きを説いている。そして織物業に関わるものは、その業の発展を機神に祈り、また、機神伝説を宣伝に利用したりして、一層の隆盛に預かるうとした。また、織り子たちは自分の技術の上達を願って機神を崇め奉っていった。一方では、産業繁栄の神として、一方では技術上達の神として、機神伝説はそれらの願いを込める対象として白滝姫を仕立て上げている。

『桐生織物史』は、白滝姫を桐生織物の祖として、平安時代に此の地に技術を伝えた織女がいるのではないかという仮説を述べている。しかし、この機神伝説は明らかに「山田白滝」伝説が元になって形成され、そういった古代に遡る事実についての手がかりは全く得られなかった。しかし、何らかの古くから地元には伝来した話があり、それを核になってこの機神伝説が創成されていったことは想像される。

古代からこの地で行われていたと思われる織物が発展をみたのは、近世中期以降であり、そうした発展には、白滝姫の機神とする信仰が大きな意味をもつものであったと解する事はできよう。ここ。二十年ほどの経済情勢の変化で桐生の織物業もかげりがみられる。しかし、桐生の町はずれからは今も力織機の音が聞こえてくる。そして機神を祀る社もまだ数多く存在する。往事の盛時を思い起こし、その変遷を追いながら機神伝説のこの地に残した意義を振り返りたい。

「注」

(1) 『桐生織物史』上巻は、昭和十年(一九三五)三月に桐生織物史編纂会の編集で、桐生織物同業組合から発行される。以下『桐織』上と表示する。一頁。

(2) 『日本昔話事典』稲田浩二他編、昭和五二年(一九七五)一二月(株)弘文堂発行 六八一〜六八二頁 難題

聳より

(3) 柳田国男の『桃太郎の誕生』の初版本は、昭和八年(一九三三)一月に三省堂から出版されている。本文は平成一年(一九九八)発行、柳田国男全集第六巻筑摩書房発行の書による。以下「山田の露」と表示。

(4) 昭和四七年(一九七二)の『国文学』に民俗文学の探訪として八回にわたって所載されている。本文は『天人女房その他』昭和四八年(一九七三)(株)桜楓社発行の書による。以下「山田白滝」と表示。

(5) 『日本昔話事典』稲田浩二他編、昭和五二年(一九七五)一二月(株)弘文堂発行、九七六〜九七七頁 山田白滝より

(6) 『桐織』上、二〜一四頁。

(7) 『群馬県山田郡誌』昭和一四年(一九三九)三月山田郡教育会発行。一五〜一六頁。

(8) 『桐織』上 三 二頁

(9) 『上州の民話』昭和三四年(一九五九)(株)未来社発行 小野忠孝編 一 一 二頁

(10) 『日本伝説大系』第四巻 北関東編 昭和六一年(一九八六)(株)みずうみ書房発行 渡辺昭五編 二四頁 この書には四話の機神伝説も文献として載せられている。

(11) 『山田村郷土誌』大正九年(一九二〇)一月山田村役場発行 六頁、丹生山田庄の沿革。

(12) 『桐織』上 二六頁

(13) 『桐織』上 五五頁 正保年中、明暦年中の二説があるが、織物史は正保説を採っている。

(14) 『絹織』上 二三七頁

(15) 「山田の露」四一五頁

(1 6) 「山田の露」 四一六頁

(1 7) 「山田の露」 四一六頁

(1 8) 「山田の露」 四一七頁

(1 9) 「山田の露」 四一七頁

(2 0) 「山田の露」 四一八頁

(2 1) 「山田の露」 四二二頁

(2 2) 「山田白滝」 一七五頁

(2 3) 『日本昔話集成』 第二部の一 昭和二八年(一九五三)(株)角川書店発行 関 敬吾著 二六六頁(二

七五頁

(2 4) 『甲州昔話集』 昭和五十年(一九七五)岩崎美術社発行 土橋里木編 五九(六)頁「木蔵お花」 昭和

十二年(一九三七)に市川重太郎氏より収録

(2 5) 「山田白滝」 一七六頁

(2 6) 「山田白滝」 一八二頁

(2 7) 「山田白滝」 二七頁

(2 8) 「山田白滝」 二九(二一)頁

(2 9) 『大日本地誌大系 摂陽群談』 昭和五年(一九三三)雄山閣発行 一七一頁

(3 0) 『山田村郷土誌』 七五(七)頁

(3 1) 『京童、京童跡追、洛陽名所集、京雀』 昭和八年(一九三三)京都叢書刊行会発行 七七頁(七八頁に

挿し絵とともに掲載

(3 2) 『本朝世事談綺』 昭和五七年(一九八二) 勉誠社発行 下一八二頁

(3 3) 『本朝世事談綺』 一三八頁

(3 4) 『撰津名所図会』 平成八年(一九九六) 臨川書店発行 四六六頁及び四六七頁及び四七五頁及び四八八頁に挿し

絵と共に記事がみられる。

(3 5) 『山田村郷土誌』 七五頁～七六頁 栗花落家系掲載

(3 6) 「山田白滝」 一九五頁

(3 7) 「山田の露」 一八一頁～一八二頁

(3 8) 「山田の露」 一八二頁に源頼政、梶原源太などが上げられている。

(3 9) 「山田白滝」 一九二頁～一九三頁

(4 0) 『民俗芸能辞典』 平成一二年(一九九九) 勉誠出版(株) 発行 志村有弘他編 二三八頁 現在も八月一

三乃至一五日に踊られる。

(4 1) 「山田の露」 一七七頁

(4 2) 「山田白滝」 一九六頁

(4 3) 『兵庫口説』(くどきと読む) 平成一一年(一九九八) 弓立社発行 村上省吾著 二二～二二頁

(4 4) 『兵庫県民俗芸能誌』 昭和五二年(一九七七) 錦正社発行 喜多慶二著 四一七頁

(4 5) 「山田白滝」 二五頁

(4 6) 「山田白滝」 一五六頁

(47) 『民俗芸能辞典』二九頁 八月一六・七日に氏神諏訪神社境内で行われる。

(48) 『民俗芸能辞典』一六頁 八月二四日の盂蘭盆に踊られる。

(49) 「山田白滝」一六三～一六四頁

(50) 『当麻村誌』昭和三十一年(一九五六)当麻村教育委員会発行

池田末則編 一七七～一八六頁に詳しく書かれている。

(51) 『当麻町史』下巻 昭和五十一年(一九七六)当麻町教育委員会発行 当麻町史編集委員会編 五四七～五

五頁 鎌倉光明寺にあり、上 下二巻本

(52) 『古今著聞集』昭和六六年(一九九一)(株)岩波書店発行

永積安明外校注 七二頁「横佩大臣女当麻寺曼陀羅を織る事」

(53) 『寺社縁起からお伽話へ』平成七年(一九九五)(株)角川書店発行 五来 重著 九七～九八頁

(54) 『当麻寺』昭和六三年(一九八八)(株)保育社発行 松島健外著 七一頁

(55) 昭和六三年(一九八八)(株)三弥井書店発行 徳田和夫著 三六四～三六六頁「当麻」は一五世紀前半

の作で阿弥陀経の功德を述べる に対し、「雲雀山」は、継子いじめを説く室町期的な作品であるとしている。

(56) 『お伽草子 研究』三六六～三六七頁

(57) 「山田の露」一八二頁

(58) 「山田白滝」一九三頁

(59) 『日本中世の民衆像』昭和五五年(一九八〇)(株)岩波書店発行 網野善彦著 一三九頁

(60) 『昔話の発生と伝播』昭和五九年(一九八四)(株)名著出版発行 福田晃著 一七頁

(61) 「山田白滝」一四八頁

(62) ア 上野国山田郡仁田山郷機神天神縁起(白瀧神社所伝)

抑、平安城は、人皇五十代桓武帝延暦十三年長岡の京より、此江移し給ふ、今に至るまで、連綿たり。関東八ヶ国は、一群より夫役之者耆人宛、毎年禁裏江相勤め、折節上野国山田郡仁田山郷といふ所より、夫役者折節、后たちのおはします坪の掃除に入たる時、白瀧の前、翠簾を揚げ御覽し、扨も東の夫、姿いやしき土民かなと思召一首詠を給ふ。歌に

吾妻より山田からすが飛来り羽ばたきをして、庭ぞはきける

打ちわらわせ給へけり。

此白瀧といふ官女は、横萩右大臣豊成公の御次女、当麻中将姫の御腹替の妹也云々。山田夫此歌の心を聞いて、大きに腹を立て、不取敢返歌をしたりけん。其返歌に

飛立ては雲井の空に羽のして大宮人をめの下に見る

斯返歌ありければ、からからと打笑せ給ひて、扨其後は無こんしゃうとて音もなし。然るに其年相勤、替りの夫共上りければ、御いとま下さるゝ折節、此度夫共に何にても望み次第に御料理下さるゝ由、綸言あり、関東の夫共、餅・酒・蕎麦切・其他思ひ思ひに御願ひ申上る。其中に山田夫は、なにか望めとありければ、某は別の望みは候はず、只白瀧の前を下し置れ候はゞ難有仕合せと、そうもんありければ、公卿百官殿上人、此由聞召して、一度にどつと打笑ひ、さても及ばぬ願ひ申すものかな。しかし、やさしき心もあり、さあらば歌合致すべし、若し其歌双方共合句致さば、白瀧の前を下し置れ候よし、綸言あり。紫宸殿に於て、歌合始めける。公卿百官殿上人車座敷開いさせ給ひけり。かかる折節、白瀧の御方より、一首遊ばし給ふ。歌

山田夫かまた目もささぬ宮人におよはぬ戀の雲にかけはし

と詠み給へば、其時山田夫不取敢、歌に

ひてりせは山田の稻も、かれぬへし落ちてたすけよ白瀧の水

と返歌有りければ、公卿百官殿上人、さてもやさしき歌の心、いふに愚なき歌合と、横手をうたせ給へば、帝系いぶんましまして、綸言如汗出て、再び歸る事なし、則ちなんじが望にまかせ、白瀧の前を、宿の妻に下し置れ、則關白殿より兩歌を書しるし、被下難有、仕合せと、白瀧の前を打つれ、本國さして立歸り、仁田山郷岩本といふ處に、假り家をしつらひ、いとなみの手遊びに、糸機を里人に教へ傳へしは、是則當國の根源なり。(夫より、則當國家業糸機をなされける。)それより禁裏に、御旗絹差上、富貴榮華の地となり給ふ。夫より天下、武將家に渡り、其例を以て、今の御公儀様江、絹代永差上候事、此時分より始りける。其後、白瀧の前、命終りて、一社の神と祭り、今に至つて、岩本といふ所に社あり。右關白殿よりの書付、今にこれあり。然るに、今古來の御神を、埋木となし奉る事、最以てもつたいなき仕合せなり。ふるきを尋ね、新しきをひろひ、誰がいふ、下つて愚なるは信用し、登りて才あらば又信用す。唯中なる者は、すゝめ難し。賢才なる者は、偽り多し。鈍なるものは、才にうとし。才に疎きは、すゝむるに益なし。誰がいふ、用ふるときは、とらとなり、用ひざる時は、鼠となり。すでに神は、人の敬ふによつて位をます。人は神の徳によつて、運をそうす。然るに、此白瀧の明神、機織神の根源也。富貴は、諸願の満てる元也。弘法大師は高野に、大黒天を安置し。伝教大師は、比叡山に三面を學教す。去れば、法然上人は、一心專念の門より、浄土他力の扉を開き、常住坐臥の念佛をすゝめ給ふ。尤神國の代として、かゝる古來の御神を、埋木となし奉る事、諸人信心薄きが故なり。依而今、此國の家業糸機神白瀧大明神とうやまひ奉り、あゆみをはこぶ輩には、糸絹の名人となり、御利益あるべしとなり。山田夫は夫婦縁結の神、山田の権現といはひ奉る。

則縁組み望みの願かけ、此御神に祈る時は、思ひのまゝにかなふべしとなり、両社の御縁日は、毎年三月初の子の日、御参詣の人、諸願みな満んす。(63) 『上野国志』(影印本) 昭和四九年(一九七四) 関東史料研究会 発行 柴田常恵外校 安永三年(一七七四) 毛呂権蔵義卿著 七七頁 山田郡仁田村の項に「仁田山と云、上中下三村あり、これ万葉に所謂、新田山なりと云説あり、新田山絹、古より名産なり、今に至りて絹を産す、此の所馬背の如き岩上の上に、絹職天神と云社あり、これ絹布を守る神なりと云」と記されている。

(64) 『桐生市史』別巻 昭和四六年(一九七一) 桐生市役所発行 桐生市史別巻編集委員会編 二八八頁

(65) 「山田の露」四二二頁

(66) 「山田白滝」一四三頁

(67) ウ 機神白滝姫御神影竝御伝記

往古、天平宝年中(人皇四十七代淡路麿帝御宇)上野国桐生の人にて、山田某なる者、朝廷につかえ奉りしに、白滝といえる宮女をこいしたい、思いのあまりに、歌をよみて送たりける。其歌

水無月のいなはの露もこがるゝに雲井を落ちぬしらたきのいと

白滝姫返し

雲井からついに落ちるしらたきをさのみなこいぞ山田男よ

此事、叡聞に達し、山田が心の切なる、又白滝姫の情有、心ばえを、あわれと覚し給いけるにや、白滝姫を、山田が妻に下したびける。山田は、うれしさ限りなく、其まゝ俱して桐生に帰り、偕老のかたらいをなしたりけるは、天平宝字丑歳なりけるとなむ。さても、此白滝姫養蚕し、糸繰り機織る事をよくし給いしまゝ、桐生の里人に、其手わざを教え給いしより始まりて、今に至るまで、桐生領中、近辺までの産業とはなりぬ。さればこ

そ仁田山村に、機神と崇め奉るは、此白滝姫の御事なり。されども、享保・元文の頃迄は、尋常の絹をのみ、織りたりけるに、京都より、弥兵衛・吉兵衛抔云う者来りて、飛紗綾を織ることを教えしより、次第次第に上手になり、縮緬・綸子・綾錦迄も、織出すようになりたる事、其源は、白滝姫の最も尊き神恩也。されば、養蚕し・糸繰り・機織る人はもとより、こがいせず、機織らぬ人々とても、皆糸絹の余沢にて、桐生領其外迄も、繁昌するなれば、ともにともに、此御神を敬い崇むべきことなり、況や糸絹売買する人々は、とりわけ尊敬信心有るべきことこそ。凡桐生の市に商する人、西上州、武州、野州其外、おしなべて、此御神の御恩沢を蒙らぬはあらず。常に此御神影を祭り奉り、弥々信心有るべき也。右は大かた人の知りたることなれども、今多くの星霜を経たれば、桐生のかく繁華になりたる其根本を忘らるゝ人も有るまじきにあらねば、猶くわしく知らしめんと、謹んでしるし侍る也。七月七日を御祭礼としたるわけは、七夕の牽牛星は、農業の事を守り給ひ、織女星は糸機の事を守り給うなるに、農業も、いと機も七月は漸に利を得る時節なる故に、いにしえより此の二星を祭る事なりとぞ。されば、此白滝姫は、桐生萬々歳糸機の祖神なれば、天の織女星になぞらえ奉りて、祭り奉る事、めでたき謂なるべし。

文化紀元歳次甲子穰七月吉辰

(六八) 『撰津名所図会』

相伝、栗花落氏の祖先、山田郡司真勝と云人、淡路廢帝の時、朝廷に仕え、其頃横秋右大臣豊成公の息女、白滝を恋慕し、千束の文、錦木の数つもりける、文の奥に、

水無月の稲葉の露もこがるゝに雲井を落ちぬ白滝の糸

白滝姫返し、

雲井からついにはおつる白滝をさのみな恋そ山田男よ

帝、これらの歌を叡聞あつて、其情の切なるを憐玉い、白滝姫を真勝に、天国の名剣を副て賜りける。斯て三歳を過て、白滝姫一男子を産て、終に死ぬ。即其家の東境に葬りて、廟塔を建てけるに、栗の花落ける頃、五月雨なれば、この霊前より名泉涌出る。天聴に達し、詔有て、白滝姫を弁財天と崇め、氏を栗花落とそ賜わりける、出生の子は、成人の後、左衛門佐真利とめされける。蕨后、鳥羽上皇此丹生山田へ行幸の時、栗花落井にて、

丹生の山くるすの花は咲きにけりわきて流るゝ栗花落の井にして

按するに横萩豊成卿は恵美押勝が兄なり、押勝叛逆の時、筑紫へ左遷せらる此真勝白滝姫もみな親族ならば、ここに隠れ去しか、豊成卿の息中将姫も、雲雀山へ蟄居せられし也。

(69) 『桐織』上 五四頁桐生領民が受けた特典として、元禄の改判料取止、宝暦の糸絹運上取消、天明の貫目改所設置中止、諸役免除助郷軽減を上げている。

(70) 天平宝字辛丑歳は天平宝字五年であるが、諸本では中将姫が入寺し曼陀羅を織つたのは天平宝字七年とされている。栗花落家の伝説を記した江戸時代の書物には月日は記されず、別の書からの引用と思われるが、二年違っているのは、作者の誤りであろう。

(71) 『古事記 祝詞』 昭和五八年(一九八三)(株)岩波書店発行 倉野憲司外校注 八一頁「天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣織らしめたまひし時」

(72) 『日本書紀』上 昭和四二年(一九六七)(株)岩波書店発行

坂本太郎外校注 三七八頁 応神天皇記「三十七年の春二月の戊午の朔に、阿知使主・都加使主を呉に遣して、縫工女を求めしむ。(中略)呉の王、是に、工女兄媛・弟媛・呉織・穴織、四の婦女を与ふ。」

(7 3) 「山田白滝」一九二頁

(7 4) 「山田の露」四一七頁

(7 5) 三井文庫文書 七一 越後屋買方之条目「此度改申渡之事」

享和元年(一八一)六月の文書に此の文言がみられる。

(7 6) 『群馬の絵馬』昭和六一年(一九八六)みやま文庫発行

丸山知良著 五 〓 五三頁

(7 7) 『八王子周辺の機織唄』昭和四一年(一九六六)長坂孝吉編集兼発行 七五 〓 七六頁

(7 8) 『桐織』上 一五頁

(7 9) 『桐生市史』下巻 昭和三四年(一九五九)桐生市史刊行委員会発行 桐生市史編纂委員会編 六 三頁

(8 0) 『桐生織物史』中巻 復刻版 昭和四九年(一九七四)(株)国書刊行会発行 桐生織物史編纂会編 四

九二頁

(8 1) 同書 五 二 〓 五 三頁

(8 2) 『明治座物語』昭和三年(一九二八)歌舞伎出版部発行 木村錦之助著 一四 頁

(8 3) 『桐生織物史』中巻 五 四 〓 五 五頁

(8 4) 『明治座物語』一四一頁

(8 5) 『桐生織物史』中巻 五 五頁

(8 6) 『桐生市史』下巻 六 六頁

(8 7) 「山田の露」四二二頁

